

# 外国にルーツのある子どもへのより良い学習支援

## ー非常事態下での対面による支援とオンラインによる遠隔での支援ー

学籍番号：199322

氏名：朱 燕男

主指導教員：臼井 智美

### 1. 背景

本研究では、外国にルーツのある子どもへのより良い学習支援の方法について、大阪市立A小学校での学校実習を通して検討した。A小学校には中国語を母語や母国語とする子どもが多い。そこで、中国語母語話者である私ができる学習支援が何かを明らかにするため、中国にルーツのある子どもを対象とした。2019年度からA小学校で実習を行い、クラス中での学習支援を行っていたが、2020年に入って新型コロナウイルスにより小学校が一時休校になったが、これにより、外国にルーツのある子どもの学習は厳しい状況に置かれた。日本語がわからないために家庭学習を進めることができないし、家庭の中では中国語で生活しているため、学校に来ないことで日本語の習得ができず日本語を忘れていく恐れがあった。また、子どもごとに家庭状況や学習能力、日本語能力などが違っていた。そういった子どもたちの実態に応じた学習支援の方法を検討する必要がある。そこで、私はオンライン授業という新しい指導方法を考え、家に引きこもり状態となった外国にルーツのある子どもへの学習支援を実践することにした。

### 2. 外国にルーツのある子どもへの学習支援の必要性

#### 2.1. 問題の所在

文部科学省によると、2019年度現在、日本では公立小・中学校に在籍する外国人児童生徒数は9万人を超えている。また、2018年度現在、公立小・中学校に在籍する日本語指導が必要な外国籍児童生徒数、日本国籍児童生徒数は5万人近くになっている。外国にルーツのある子どもに対して、文部科学省は、子どもの課題に応じて日本語指導等を行うように地方自治体に求めており、教員加配や教員研修、日本語指導員等の配置・派遣も行われているが、それが「十分に」行われているわけではないことが学校実習でわかった。また、外国にルーツのある子どもが受ける日本語指導や言語環境により、言葉の壁を越えるには時間がかかる場合が多く、現在地方自治体などで行われている日本語指導の体制では、子どもが教科内容を十分に理解できるような日本語力を身に付けることは難しいことを実感した。そこで、外国にルーツのある子どもへの学習支援のあり方を考え直し、オンラインでの個別支援という方法を実践することにした。

#### 2.2 研究方法

A 小学校で外国にルーツのある子どもの学習支援を行い、子どもの学習の様子や日本語力、教科の理解状況などの把握を行った。2019年度は、中国にルーツのある子どもの在籍する3年生のクラスをベースとして、6時間目までの授業や放課後での対面による学習支援を通して子どもの様子の記録（文字記録）を行った。2020年度は1学期はオンラインによる支援、2学期

はオンラインと対面の併用による支援を行い、それぞれで子どもの様子を文字で記録した。子どもの支援を通じて収集した情報について、匿名化した上で研究資料として使用することを、保護者に文書（日本語と中国語の併記）と口頭（中国語）で説明し了解を得た。なお、A小学校の情報についても、実習校の特定につながるような詳細な情報の記載は行わなかった。

### 2.3 学習支援対象の子どもと支援内容

私が学習支援を行った子どもは全部で8人がいるが、そのうち中心的な支援対象だった5人を取り上げ、それぞれの来日時期、母語力、日本語力、学力、家庭環境、学校生活に必要なだと考えた支援、指導時の使用言語と補習内容について述べた。

## 3. 学習支援の実際

### 3.1 Xさん（1年生）の指導

### 3.2 Mさん（1年生）の指導

### 3.3 Sさん（3年生）の指導

### 3.4 Aさん（4年生）とLさん（4年生）の指導

いずれも、子どもに関する詳細な個人情報が含まれるため、要旨への記載は控えた。

## 4. 学習支援から得られた知見

### 4.1 学年（年齢）による指導や教材選択の難しさ

オンラインでの指導や使用教材の選択は、子どもの学年や学力を考慮しないとうまくいかないことがわかった。日本語力が未熟な子どもの、教科の知識や日本語力の習得状況をオンラインで測定するのに適した既存の手段がないため、子どもと接しながら模索するしかなかった。

### 4.2 指導形態による指導の難しさ

子どもの日本語力がそれぞれのため、集団での指導では効率が悪いことがわかった。また、子どもの性格や家庭状況により、オンラインで指導する場合の注意点も抽出できた。一方、外国にルーツのある子どもの指導経験のない教員に対して、どのような授業形態や使用言語が子どもの力を伸ばすのに適しているのかを伝え、共に考えることの難しさもわかった。

### 4.3 子どもの力の測り方（評価の仕方）の難しさ

外国にルーツのある子どもの場合、母国で学力が高かったとしても、日本語がわからないために、日本での学力の測定が容易でない。また、言語力も子どもの母語の影響を受けるため、適した測り方を見つけることが容易ではない。大阪市が用いている言語能力測定法は元々外国人向けに開発されたものではないため、中国にルーツのある子どもは、日本語自体はわからないのに漢字を見てニュアンスで解いて正解する場合もあったし、逆に日本独特の慣用表現が入ると、漢字から推測することで言葉の意味の混乱をしてしまう場合もあることがわかった。

### 4.4 保護者との連携の重要性

特にオンラインでの支援を通して、保護者との連携の重要性がわかった。オンライン授業では保護者に接続設定をしてもらう必要があったため、その機会をきっかけに、保護者と直接、中国語でやり取りする機会が増えた。保護者との連携が深まることで、子どもへの理解も深まり学習支援もしやすくなるだけでなく、子どもの心身の健康にもつながることがわかった。